

## 中国河北省のサツマイモ事情

日本いも類研究会会長

こ ま き かつ み  
小 巻 克 巳

### はじめに

昨年、中国河北省邯鄲（ハンダン）市で開催された「東アジア唐芋ワークショップ」で知遇を得た河北省石家庄市の農業産業協会の庄偉事務局長から、当地で行うサツマイモ交流会の話題提供者として参加要請があり、それに応じる形で本年7月21日から25日まで石家庄市に出かけることになった。

この間、これまで海外であまり経験したことのない生産者や加工業者との交流に加え、近年中国政府が重視している農村振興策について情報を得たので、その内容を簡単に紹介したい。

### 交流会の概要

交流会が開かれた石家庄市は河北省の省都で、北京市から約300km南に位置する。人口は1千万人を超えるが、市の中心部を離れると、あたりはトウモロコシやサツマイモが広く栽培されている。

交流会は1日目（7月22日）の午前に石家庄市東部の深沢県（写真1）、午後と同市中心部にある石家庄市農林科学院で、2日目は同市西部の靈壽県でそれぞれ2時間程度行われた。講師は筆者と石家庄市農林科学院の宋聚紅氏で、筆者の話題は1日目が「日本における高でん粉サツマイモ品種



写真1 石家庄市深沢省での交流会の参加者

開発の現状」、2日目が「日本の高糖度サツマイモ品種開発の動向と生産状況の推移」であった。宋氏はいずれにおいても「点滴灌漑を用いたサツマイモの高品質多収栽培技術について」を取り上げた。

宋氏の話題は水分、養分、農薬を必要時に適量投与する点滴灌漑技術であり、後述するようにすでに現地実証試験が行われている。その概要は、まず、大きめの畝を作り、同時にその頂点に灌水チューブを設置し、それにマルチをかける（写真2、3）。これを1工程で行う。大きな畝には苗を2列に植え、その後、必要に応じて灌水用タンクからチューブを通して灌水、施肥および農薬施用を行うというものである。本技術の利用に際して、どのような農地整備が必要か、現在のサツマイモの栽培体系に適



写真2 点滴灌漑栽培におけるマルチ作業



写真3 点滴灌漑用装置

用可能か、またどの程度効果があるのか不明であり、今後の経営分析が期待された。

### 石家庄市農林科学技術院での懇談

農林科学技術院では職員との交流の後、院長をはじめとした主要な職員と懇談を行った（写真4）。サツマイモ育種担当の王勝山氏によれば、冷凍焼きいもに適したサツマイモ品種を開発しており、焼きいもを個別に包装紙で包んだのち、冷凍して、提供するとのことであった。サツマイモの



写真4 石家庄市農林科学院の幹部との懇談風景（中央右が院長）

風味がしっかりしていて、甘さは強かったが、イモの表皮がやや褐色を帯び、肉色も灰白色であった。当方からはこの品種が消費者や加工業者からの要望に十分応えられるのか質問したが、明確な回答を得るに至らなかった。

### 生産者の興味

深沢県の生産者は日本の品種に非常に興味をもっていた。ある生産者は恐らく「シルクスイート」のことと思われるが、品種名が「シルク」というサツマイモを用いた美味しそうな焼きいもの写真を見せてくれた。また、他の日本の品種の入手方法を何度も尋ねられた。当方からは、種苗の利用は「UPOV条約（植物の新品種の保護に関する国際条約）や日本の種苗法に則らない限り不可能であり、さらに種苗権者の了解が必要である。現在、日本では国の予算を投じて育成された新しい品種が外国で利用されることに厳しい目が向けられているため、入手することは困難と思われる。」と回答するとともに、決して不正な入手を試みないように伝えた。

霊壽県は深沢県よりかなり農村部の色合いが濃く、サツマイモの栽培面積も大きかったが、ここではサツマイモ基腐病（以下基腐病と呼ぶ）についての相談が多かった。被害はかなり深刻なようで、畑で発病した場合に有効な農薬はないか、最も有効な防除法は何かなど、矢継ぎ早に質問を受けた。当方からは農研機構が発行している「サツマイモ基腐病の発生生態と防除対策」に基づいて回答したが、農業普及部門の対応が追いついていないような印象を受けた。なお、最近サツマイモの栽培が急増している内モンゴル自治区でも基腐病の発生が認められているとのことであった。

### 現地ほ場の視察

霊壽県では石家庄市農林科学院の宋氏が行っている点滴灌漑の実証試験ほ場を視察した（写真5）。こうした実験ほ場をサツマイモの国家プロジェクトでは「基地」と呼んでおり、その地域の先進的生産者が協力している。霊壽県での協力生産者はサツマイモを260畝（ムー、約17ha）栽培しており、基腐病は実証試験区では認められないが、他のほ場では発生しているとのことであった。ただ、発生がないというほ場でも生理障害なのか、異種混入なのか、あるいは病害なのか判然としないが、地上部が他に比べて葉色が黄色い株が認められた。この時点では株元に明確な病害の兆候はなかった（写真6）が、今後の生育状況には十分な注意を払う必要があると思われる。

### 農村振興に関する国家的プロジェクト（郷村振興）

交流会の合間に石家庄市正定県にある塔



写真5 石家庄市霊壽県での現地視察



写真6 現地ほ場でのサツマイモの生育状況を確認する筆者



写真7 塔元庄同福乡村振兴園（石家庄市正定県）

元庄同福郷村振興園を訪問した（写真7）。「郷村振興」は発展の遅れた地域、特に農村部の振興を目的としたもので、習近平政

---

権の重点政策である。習氏がまだ若かった1980年代前半に正定県の党委員会の副書記を務めたこととの関連は明らかではないが、この園には巨大な投資が行われていた。生産面ではスマート農業や植物工場の導入、生産物の付加価値を高めるための食品加工の推進、そのために必要な地元住民や外部人材のための高層住宅の建設、教育施設や老人介護施設の充実など、目標達成に向けて大規模な集団活動が行われていた。

### おわりに

今回の訪中では通訳が同行したものの、関係者との意志疎通が十分であるとはいいがたかった。しかし、理解できたことを繋

ぎ合わせてみると、国の政治の性格によるものかもしれないが、研究機関から提供される技術がややもすれば、生産利用現場が求めるものと乖離がみられるように感じた。そしてそれが、生産者の日本の品種への興味につながっているように思えた。また、基腐病対策などに対する現地の研究員や普及指導員の活動がやや不明瞭で、後手に回っている感があった。

ただ、この国のサツマイモに対する研究投資は莫大であり、今後、直面する問題に対して国家的な見地からなんらかの強力な対策が講じられるのは間違いないであろうと強く思ったところである。